

「45年間のホワイトヘッド研究を回顧して」と
「ホワイトヘッドの抱握理論」(チャールズ・ハーツホーン)

大塚 稔

*Whitehead after Forty-five Years and
Whitehead's Theory of Prehention from Hartshorne's Essays*

Minoru OTSUKA

Summary

The original of these two essays translated here into Japanese is *WHITE HEAD'S PHILOSOPHY: Selected Essays 1935-1970*, which was written by Charles Hartshorne. In this volume he has gathered together a number of pieces previously available only in widely scattered places; one was written newly as the introductory chapter of the collected papers, but the other was first printed in *Actas: Segundo Congreso Extraordinario Interamericano de Filosofia* 22-26 July, 1961, pp 167-68. The latter appears as Chapter 8 of the collected papers. The volume as a whole reflects a combination of interests in Whitehead's Metaphysics that he has maintained for more than thirty years. Here, however only two of them will be presented.

解題

ここに訳出した論文「45年間のホワイトヘッド研究を回顧して」と「ホワイトヘッドの抱握理論」は、共に『ホワイトヘッドの哲学』(1972年刊)と題された書物に収められている。これはチャールズ・ハーツホーンが1935年から1970年にかけて雑誌等に発表した論文の中から、ホワイトヘッド関係の論文だけを集めたものである。いわば彼のホワイトヘッド研究のエッセンスとも言うべき論文集である。なお、はじめの「45年間のホワイトヘッド研究を回顧して」という論文は、その書物の第1章序論に、また「ホワイトヘッドの抱握理論」は、第8章にそれぞれ置かれている。

ハーツホーンは、ホワイトヘッドの警弦に接しえた今なお存命の数少ない哲学者のひとりだが、同時に、C.S. パース研究の草分的存在としても知られるアメリカ哲学界の長老である。その彼が、この二人の哲学者に自分と同じ気質を見出した経緯と終生を賭したホワイトヘッド研究を総括してみせたのが、この論文である。従って、この論文は、1つには哲学者ハーツホーンの来歴を知るうえで、また1つには、彼自身のホワイトヘッド研究ならびにホワイトヘッド哲学への忌憚のない意見が披瀝されている点で、我々に興味深い示唆を与えるものと言える。45年に及ぶ研究を回顧して、彼自身が下したほぼ最終的な結論がこれである。切り捨てられるものは容赦なく切り捨てて、どこまでも自身の哲学的センスを優先させているのはさすがである。単にホワイトヘッド哲学の解説に脱せず、常に真理こそ眼をやろうとする姿勢には学ぶべき点が多い。彼がホワイトヘッドとパース

との三者会談を強調する点もそこにこそあるが、ことホワイトヘッド哲学全体に対する解釈は直弟子にありがちな好意的解釈が目につく。しかしその件に関しては、既に彼自身が述べている通りである。

ハーツホーンは元来、神学者であり、ホワイトヘッド哲学に対する関心も、主に神の問題に向けられてきたが、それに尽きるわけではない。ここでホワイトヘッドの認識論を扱った論文を加えているのはその為である。これは論文というより付言に近く、コメントの域を出るものではないが、序論を総論と解してもらえば、各論程度の役割は果たしていると考える。

なお、ハーツホーンの把握理論に対する幾分まとまった研究には1979年9月号の *International Philosophical quarterly* 所収の「ホワイトヘッドの革命的概念 把握」がある。

45年間のホワイトヘッド研究を回顧して

私がハーバードの大学院生の頃には、『自然という概念』を通読したり、『数学原理』のごくはじめの数節を眼を通したことはあったが、ただそれだけで、ホワイトヘッドにも面識はなかったし彼の哲学についてもよくは知らなかった。しかし、1925年に若輩の講師として、彼の代わりに学生の答案を採点する必要から彼の講義を聴講するようになったことや、彼の形面上学的諸著作が公開されだしたこともあって、かなり集中して彼の著作を読むようになった。勿論、一方では同時に、ホワイトヘッドのもの以上にチャールズ・パースの諸論文に精力を傾けていたのは言うまでもない。アメリカやドイツでの8年間の学生生活の後に、ようやく私は、この二人の師のうちに、私と同様な気質を持った哲学者に巡り合ったという感情を再三にわたって抱くことができた。しかもこれもはじめてのことだが、彼らに対しては、批判するよりも受け入れようとする気持をいつ知れず起こさせるほどに、私が熱烈な支持者になっていたことである。1920年代後半にパースについて書いたもの（その大半は公にされていない）や（それより幾分後に書いた）ホワイトヘッドに関する諸論文を見ると、いかにこの種の感情が強いものであったかがよくわかる。パースの著作集を（ポール・ワイスとの共同で）編集してから、ほぼ40年の歳月が流れているが、その間にことパースに関しては、比較的客観視できるようになってきている。

パースとホワイトヘッドには、私が直接学んだ学部、大学院、博士号取得後の教授達以上に、私の考え方と同質な点が沢山あるが、ここではそのうちの3点だけを挙げておく。(1)私は(1922年頃に)『自らを形成する自己』<The Self its own maker>という論文 <a class essay>を書いたが、その表題からも察せられるように、その時すでに私はパースの自発性<spontaneity>ないし第一性<firstness>のカテゴリー、およびホワイトヘッドの創造性ないし自己創造的創造物<self-created creature>のカテゴリーの一般化をねらっていたこと。(2)また、私が利他主義<altruism>の正当性を利己主義<self-interest>によって基礎づけることは、形而上学的な迷妄であるとする見方を擁護する論文を書いたこと。というのも、利他主義の根本原理は愛であり、自愛<self-love>は単にその数ある1つの表現にすぎず、いかなる意味においてもその源泉とも根拠ともならないからである。パースもホワイトヘッドも共にそうだが、とりわけホワイトヘッドは、私が以前にロイス(彼は不明瞭にしか述べていないが)や聖パウロの私達はお互いに肢体なのであるからという言葉に見い出していたこの種の理論に、独自の解釈を施している。(3)私と私を主に啓発してくれた二人の師の間に見られる予定調和とも言うべき部分的な一致は、次のようなものであ

った。宗教の解釈者として唯一私に感銘を与えたハーバードの教授は、人格の不滅性を宗教の中心問題と見なしていたが、私はというと、たとえ以前にはそのように考えていた時期があったとしても、それが宗教的生活に不可欠な観点であるとする見方には、かなり前から決着をつけていたこと。ここでも、パースとホワイトヘッドとは、私に近しい哲学者だったのである。つまり、彼らにとっても私同様、超俗的で不滅は要因とは、ただ世界の詩人（これはホワイトヘッドの用語だがパースにも似たような考え方はある）としてある神そのものにほかならず、我々の永続性は、現世での生活がその詩に織り込まれて行く（ある程度は自らも織るが）中にあるのであって、死後の歩みにはないということである。

上述した三つの問題以外にも、多くの点でパースよりもホワイトヘッドの方が、明らかに均整のとれた完全な理論を展開しているように思える。しかし（あとで述べるように）勿論なかには私にはどうしても受け入れがたい考え方が、パースにはなくてもホワイトヘッドにはあることも事実である。従って『聖なるものないし絶対的善における存在の総合』〈The Unity of Being in the Divine or Absolute Good〉という博士論文を書いた小生意気な若輩の形而上学者（既に幾分かは、その独創性において他方では名声を得ていた）から今日に及ぶ私の発展はある程度までは互いに全く独立していながらもライブニッツ的な視野と独創性を持ったこの二人の師との間の三者会談によって形成されたと言ってよい。時には彼らとの類似点に励まされ、また時にはその相異点に刺激されつつ、今日の私は形成されたのである。これが幸運と言わずして何であろうか。

この書物に収められている諸論文は、1935年から70年にかけて書かれたものだが、ホワイトヘッドに対する私の見方には、それほど大きな変化はない。同意できる点はどこまでも摂取しようとしてきたし、同意できない点は無視するか批判する立場を守ってきた。それ故、感じ〈feeling〉や感覚作用〈sensation〉の諸形式が持っている、限定的〈definite〉だが始源的〈primordial〉な多様性としての永遠的对象〈eternal objects〉には全く関心がなかったし、現実的存在〈actual entity〉（具体的な単位を構成する出来事）の生成を初期と後期に分けて分析する彼の見方にも全く注意を払わなかった。また、現実的諸存在が消滅すること〈perishing〉も、単に誤解をまねく隠喩としか考えてこなかった。というのも、それを文字通りにとれば諸存在は生成するが変化しないという彼の説に矛盾をきたすからである。1つの存在は、（外的な観点からすれば）ある有限な時間内で生成し、他の先行者〈predecessors〉とともにその存在を客体化〈objectify〉する別の諸実在〈actualities〉によって引き継がれて行く。諸々の客体化は多かれ少なかれ、（それらが否定的な抱握〈negative prehensions〉によって限定されているという意味では（抽象的で不十分なものであるが、神による〈divine〉客体化は別である。私の理解が正しいければ、それにはなんの損失もなんの障害物も、つまりはいかなる欠陥もないからである。

ところで、1つだけ見方が変化したものがある。数年来、私は同時的な諸実在が相互に独立しているとするホワイトヘッドの説を論駁し続けてきたが、近頃になって私はホワイトヘッドの見方を弁護するようになってきた。というのも、私の当初の見方のほうが、逆に誤まっていたと考えるようになったからである。他に二つばかり変化があるが、それは確信が変化したというより、強調の置き所が変化したものすぎない。例えば、初期のいくつかの論文では、私はもっぱら持続する個体〈enduring individuals〉（ホワイトヘッドのいわゆる諸出来事〈occasions〉の社会〈societies〉だが、特に私的に秩序づけられた純粋に線型的な社会を示す）の観点からのみ述べていたということ、しかもそれらの個体を実体とさえ呼びながら展開しているという点である。この点に

については1920年代はじめに公刊された『自然という概念』において、事象〈events〉こそが真なる存在〈reality〉の具体的単位であって、物や人や実体などではないとよく心得ていたにもかかわらず、また後期の諸著作では擁護された生成の非連続性の理論、すなわち諸出来事は客観的には単一〈singular〉なのだとする考え方も、当初それに出会った時には全く私には誤まっているとは思えなかったにもかかわらず、そうなのである。しかし、私はその理論が絡んでいる場合にはいつも、それをなかなか思い出せるほど完全に自分のものにすることができなかった。この欠陥がはっきりと認められるのは、4章と5章である。

同様な理解の遅さは、経験を過去に結びつけているのは、通常記憶だけであるかのようにしばしば書いている場合にも見られる。これも覚えている限り、決して知覚〈perception〉にも同様に過去に向けられた関連があるという証拠やホワイトヘッドの主張を、拒否したことはないのである。この種の混乱は、私的な記憶と知覚と同じものである公的な記憶との間の区別を定式化してしまった際に一掃された。これら二つの形式に共通な一般化された意味での記憶は、ホワイトヘッドの用語では抱握〈prehension〉と呼ばれているがホワイトヘッドがこの私の定式化を好んでくれたであろうということに、私は全く疑いを持っていない。なぜなら、その定式化は因果関係は物理的記憶である—というも（自分自身の過去の諸経験を連続して受け入れるという）私的な記憶にごく普通に見られるその意味が、因果的結合関係の単に1つの（ホワイトヘッドの用語では）成分〈strand〉にすぎないから—というホワイトヘッドの主張に暗黙のうちに語られているからである。

既におわかりのことと思うが、私の主たる狙いは常にホワイトヘッドの真意を確定したり、伝えたりすることよりも、むしろホワイトヘッドを通じて私自身が真理に至ること、また他の人々に彼を通じて少しでも真理に近づいてもらうことにある。概して私には、それと認めうる限りの諸観念を他の哲学者達に帰する傾向があるので、これが時に、そこで扱われた著者への媚びを生み、更には実際以上に彼らを賢明なものにしてしまうこともあるがこのことにかけては、ホワイトヘッド自身もかなり有名であった。しかし思うに、この手続きを逆にして実際以上に彼らを愚かなものとするよりは、少なくともこのほうがましだろうというのが、そのことに対する私の唯一の弁明である。私はこれまでに百冊に及ぶ書評を書いてきたが、そのような場合にも薄弱な根拠に立った誤りだけは避けようと努めてきた。実際には主張してもいないし、また主張したとも合理的には示せそうもない意見をその論者に帰するようなことだけは差しひかえてきたつもりである。しかしこのことで私は、書評家として、一体あの書評家は無能なのか、それとも卑劣で怠惰なために自分の書くことに相手を巻き込むだけの勇気がないのかといった、明敏な読者なら誰でも抱くようなジレンマを抱かせたと処められた記憶はない。

既に明らかなように、私のホワイトヘッド解釈は、過去および将来にわたる不特定多数の解釈のうちの単に1つにすぎない。もし私が、ホワイトヘッドを過大評価しすぎているとすれば、それは彼が生まれ教育されて過ごした最初の40年間に受けた母国イギリスの不当な評価によって、少なくともそのバランスは保たれていると言って差しつかえないであろう。

ところで、このバランスということで気になる点は、以下の諸論文ではイギリスの哲学的伝統に対するホワイトヘッドの関係には全くと言っていいほど触れられていなかったということである。カントは、ヨーロッパとイギリスの双方の伝統をかなり正当に評価したドイツの第一級の独創的な哲学者としてしばしば激賞されてきたが、ホワイトヘッドも、ヨーロッパ哲学の根本的な諸観点を自分のものとした、第一級の独創的なイギリスないしアングロアメリカの哲学者として認められて

しかるべきことは明らかである。私見によれば、ホワイトヘッドはカントがライブニッツを理解していたのと同程度には、ロック、バークリー、ヒュームを（そしてジェイムズも）理解していたし、全ての偉大なヨーロッパの哲学者達〈Continental〉とも、意識的に同意しようとする深い見識を持ってもいた。従って、例えば経験という概念ひとつを取り挙げてみてもそれが知覚・記憶・学習情緒および目的、換言すればそれが期待通りの結果を伴う原因としての事象への反応という意味に解されるとすれば、そのような経験を持っているのは、単に人間だけとは限らないという明白な問題を真に体系化しえたのは、ライブニッツ以後ではホワイトヘッドがその最初にして最大の者だと言ってよいであろう。イギリスの哲学者やカント、更にはヘーゲルでさえ一体この自明な事柄を考慮していただろうか。ホワイトヘッドは、ライブニッツとパースに同意しながら、人間にまでは至らない様々な経験の諸観念を十分に一般化することによって、全自然がこの種の手続き〈tems〉で解釈されうることを示した。また彼は、バークリーとライブニッツに拠りつつ、デカルトやロックとは意見を異にししながら、単なる延長ないし単なる第一次性質などは、具体的かつ現実的ななんらの本質も構成しえないことも開示した。更に彼は、ライブニッツとカントに拠りつつ、自然は人間的ないし超人間的な精神の単なる諸観念の束ではありえないこと。しかし同時に、ヘーゲルに拠りつつ、我々の覚知〈awareness〉に現われはするが、全く隠されている物自体の観念は、ばかげたものだということも理解していた。しかも、ロック〔とライブニッツ〕に拠って、対象の構成は実際問題として、ほとんど我々の直接的で明白な諸知覚からは隠されているということにも同意しえた。また彼は、ヒュームにならって単に動き回るだけの死せる物体は、それ自体としては継起する出来事の因果的結合関係を示しえないことを全く確信してはいたが、カントに即して（より以上に明確に）その結合関係を構成するのが、それ自体が経験でもある経験のその時間的構造にあることも理解していた。一方、ヒュームに即して彼はまた、単に無限で、絶対的で、不変な神というものは、空虚な抽象物でしかないということ、そしてヘーゲルに依って（より明確に）真理は対立物の総合にあるということ、つまり、絶対的なものと相対的なもの、無限なものとは有限なもの、客体と主体との、それは総合にあることを知悉していた。

イギリスの哲学は、その極端な例外であるバークリーの認識論やそれより幾分穏やかな例外と見られるヒュームの懐疑論を別にすれば、一般に実在論的傾向にあったが、とりわけ今世紀に入ってからはその傾向が更に強まっているように見える。ホワイトヘッドはまさに、これまでほとんど全ての哲学者達によって看過されてきたその実在論の秘密を発見したのである。すなわち、それは経験することと経験したこととのその時間的構造こそが、つまりはそのパラダイムこそが、記憶に他ならないという発見である。遠くの事象は、我々がそれらを知覚する際には、既に生起してしまっているという既知の事実を利用して、つまり、過去の事象は現在もはや存在しない以上、それらは記憶を頼りに現在何が起っているかを直知する〈intuit〉ことはできないし、感覚与件〈data〉としても享受しえないという偽似公理を逆にとり、実際に生起してしまっただけが、経験に対する感覚与件として明確な実在でありえること。従って、現在生起しているものは単に途上にある実在にすぎず、未だ客体化される用意が整っていないものと見なせる、という興味ある解釈を、ホワイトヘッド以前に、一体誰がこれほどはっきりとなしたものがいただろうか（パースとベルクソンはもう一步のところまで来てはいたが）この意味では記憶が知覚に鍵を供与するのであって、その逆ではないことになる。ここに、ホワイトヘッドの無比な独創性がある。というのも、彼は客体的には単一な〈singular〉事象、すなわち現実的存在〈actual entity〉という考え方を採って

いるからである。(この両方の点で、一見それとは知らずに、彼は古代仏教の教説に関わっていた)これらの考え方をもとに(我々は単に当の意識自体を意識するにすぎないという)現代哲学に瀰漫している主観主義の弊害は、完全に克服される。あらゆる現実的存在は、その所与に他の現実的諸存在を持っており、それらの他者性< otherness >はそれらの時間的先行性によって保証されている。しかしながら、全ての観念論およびほぼ全ての東洋哲学が持っているその基本的な洞察—単なる死せる物質は抽象にしかすぎず、あるべき具体的実在ではない—は、ホワイトヘッドの体系にも充分に取り込まれている。現実的諸存在は、後続する諸経験に対象として作用する諸経験であり、それらはそれらの後続する諸経験が意識< consciousness >の同じ私的流れに属していようとしまいと関係がない。この見方は、あらゆる種類の独我論とも、また、精神と単なる物質とのあらゆる二元論とも無縁である。こうして、現代思想のとりわけ害のあるいくつかの病弊は超克されるわけだが、更にもう1つこれに付け加えるとすれば(身体外の)対象はいかにして知るかという問題を処理する際に、身体を見落としてしまう習慣を挙げることができよう。ホワイトヘッドは、その知覚理論において(後期のメルロ、ポンティー同様)他のどんな感覚与件であろうと経験が身体の過程から成り立つことを決して看過してはいない。

これほどの洞察が、多くの者を混乱に陥し入れてしまうことは、おそらくなんら驚くには足りないであろう。とりわけ、哲学することにおいて、慎重さや野心のなさ、素人さを誇りがちな伝統の中では、そうである。周知のように、ホワイトヘッドはその人生の大半を、主に数学者として過ごしていたにもかかわらず、1925年以後の10年間は、極めて専門的かつ冒険心に富んだ哲学者であった。彼は、プラトンの忠告そのままに哲学者となったものだと言ってよい。つまり、イギリスのプラトニストとは違って、善と人生に対する一般的な反省に加えて、幾何学をも熱心に研究して哲学者となったということである。ただしホワイトヘッドには、諸観念を分析する道具として、プラトンには唯一欠けていた発達した形式論理学があった。がしかし、これも現代の論理学者に若干見られるとは異なり、彼はこの種の論理が根本的な諸観念の構造開明には、たいして役立たないことを知悉していた。そしてこのことが、結局、円熟した体系において彼がその種の論理をほとんど利用しなかった1つの理由であろうと、私は思う。勿論、その論理学が彼の思索に始終、広範囲に渡って影響を与えていることは事実である。というのも1つには、それが、哲学ではかなりめずらしいことだが、本質的な関係賓辞(内的関係)と非本質的な関係賓辞の両方を認める二元論の必要性に、彼が思い至ったその主たる源泉となっているからである。グリーン、ブラッドリー、ボーズンキッド、ヨアヒム、ホイソン、ロイスなどは、この洞察の一方を欠いていたし、ムーア、ラッセル、初期のヴィトゲンシュタイ、ペリー、スポウルディング、更にはある程度はジェームズでさえ、その一方を欠いていた。両方を見るという点では、パースとホワイトヘッドに匹敵するものはいないであろう。

[ホワイトヘッド主義者達とその同時代の哲学者達との深刻な対立は、おそらくヴィトゲンシュタインとライルらの諸著作—これらは時として、多分誤って解釈されているだろうが—によって鼓舞された傾向、つまり極端な行動主義に進もうとする傾向から生じている。この問題は、ギリシアの原子論と同様に古いものであろう。というのも、その原子論はファイヤーアーベントや他の者達の努力にもかかわらず、常に、ほとんど全ての問題を説明せずに残しているからである。第2次性質と第3次性質< tertiary qualities >、経験の総合、瞬間的< at a moment >か持続的< through time >か、また我々の根本的な諸カテゴリー、例えば因果作用と秩序および自由等

々の問題がそれである。パースが述べていたように、唯物論は世界が世界を見るというに等しく、世界を理解不能なものにしてしまっている。物理的な事物は、単にそれだけでは変化し移動する形態、すなわちいわゆる第1次性以外の何ものでもない。が、ホワイトヘッドの分析によれば、それらは全く抽象的な様々な段階の精神（主観性、感じ）の純粹に關係的な観点と見なされる。唯物論は精神を積極的に肯定せず、むしろ除外し否定するという点で、ホワイトヘッド主義とは異なっている。分子のようなものが、感じの最も未発達な形式さえ欠いているという点について、それがどのように知られるのかはつまりその論拠は我々には全く語られてはこなかったのである。

現代の唯物論は、言葉には公的な意味がなければならないということに訴えるが、ホワイトヘッドの理論によると、苦痛、哀しみ、喜び、記憶、知覚のような言葉の意味も、たとえそれがあられる限られた私的な観点での経験であるにもかかわらず、いかにして知られるかがなんの困難もなく理解されるように思われる。私はある方法であるものを今感じ知覚したことが分かっているということと私はあなたがあなたの方法でそれを今感じ知覚したことが分かっているということとは、明らかに違う。もっとはっきり言えば、私はある夢を今見たことが分かっているということと私はあなたがあなたの方法でそれを今見たことが分かっているということとは違うということである。ホワイトヘッドにとっては、これらの否定しがたい違いが全てだと言ってよい。彼には、自分の仮定に立つ限り、諸主体の経験に見られるその絶対的な近づきがたさや比較不能性を主張する必要は全くない。人間の瞬間的な諸経験が、現実的でも統一的な事象でもないとする見方は、私には全く独断的なように思える。というのもある生理的な出来事〈occurrences〉の伴わない経験などありえないと、ホワイトヘッドが注意深く述べた理由は、一般に認められている事実からは全く出てこないからである。流行の言語理論が自らの唯物論的偏向に対して、なんらかの根拠や弁明ですら与えているのかどうか、私には疑問である]

現実にドイツの思想を支配してきたのはカントではなく、より極端にドイツ的なヘーゲルや後期のハイデガーであったと考えるのはおもしろいし、同様に、イギリスの思想を支配しているのが、ホワイトヘッドではなく、より極端にイギリス的な思想家達、例えば、ラッセル、ムーア、ライル、ウィズダム、オースティンやその後継者達、および分類しかねるヴィトゲンシュタイ（彼の後期の思想も、偏狭的なまでに超イギリス的であった）であったと考えるのもおもしろいかもしれない。しかしドイツやイギリスよりはもっと混沌としてはいるが、ある意味では重要な、この北アメリカというより自由な世界〈arena〉では、思想的独裁者など全く存せず、思想が理性的に語られさえすれば、たとえそれがどんなものであっても語る機会を与えられている。ホワイトヘッドは、思想がそうあることを望んでいたが、その点については私も同感である。

ホワイトヘッドの抱握理論

20世紀の形而上学 — 事実このようなものは存在している — においては、ホワイトヘッドは17世紀のライプニッツやスピノザのような立場を占めている。ホワイトヘッドの哲学にいかなる欠陥があろうと、彼の抱握理論〈theory of prehension〉が認識論に与えた貢献は、これまでになされたもののなかでも第一級のものだと言ってよい。

抱握という言葉は、把持する〈apprehension〉という言葉のはじめの音節を落として創られている。抱握はどちらかという複雑な全体をなす意識〈awareness〉活動の一部ないし一局面であ

り、ある対象を把持する〈the having〉という経験ないし働きに見られる純粋な所与性〈pure givenness〉の要素である。ホワイトヘッドにとって、経験とは現実的存在や出来事と呼ばれる統一的事象〈unitary event〉つまり過程に他ならない。ある存在に対して与えられたり、ある存在によって抱握されたりする具体的な事物は全て、先行の事象ないし現実的存在やそのような存在の1つのグループである。同時的な諸事象は、厳密に言えば抱握されることはないし、抱握するというその動きの後に続いて起こる諸出来事も抱握されることはない。従って、記憶と知覚とは、両者の対象が共に過去にあるという点で似ていると言える。知覚がこのように記憶に同化されるところがこの抱握理論の極めて独創的な点となっている。

先の〈earlier〉事象が後の〈later〉事象に依存することがない以上、既に与えられている時間的に先行した〈prior〉諸存在がそれらの実在性〈reality〉をあれこれの特定の主体の存在〈being〉に依存しえないことは言うまでもない。この主-客関係は、所与のもの〈thing〉や抱握されるものにとっては、外的つまり非構成的であるが、抱握する当の主体に対しては、内的つまり構成的である。個々の〈a particular〉主体は、それが抱握すべき〈does prehend〉諸事物を抱握しなければ、本当の意味での主体〈that subject〉、本当の意味での瞬間的な経験をなしているとは、おそらく言えないであろう。これが、いわゆるホワイトヘッドの因果的能動性〈causal efficacy〉ないし順応〈conformation〉と呼ばれるものである。現在の出来事とは、それが自らの過去を抱握するある仕方に他ならない。ヒュームは、この点に関して明らかに矛盾を犯している。諸事象は正別できる〈distinguishable〉が分離することはでき〈separable〉ない。なぜなら、後の〈later〉事象については仮に分離できうとしても、それが抱握する先の〈earlier〉の諸事象に関しては区別できるが分離しえないというようにしかありえなかったであろうから。因果的能動性はそれ故、先のもとの後のもを単に神秘的に結びつけただけのものではない。というのも、Xが存在しなければXによる抱握などあるはずがないし、抱握がその抱握に先行する諸対象を創造できない以上、それらの対象はその現実の過去によって抱握に与えられねばならないからである。結局、主体を抱握する現在が、ある過去を必要とするだけでなくその過去も、特にこの主体というわけではないが、ある適当な主体が、つまりその特定の過去を抱握できる主体が必要とされる。換言すればある特定の主体によって抱握されることが、ものにはどうしても不可欠だというのではなく、相応しい抱握をなしうるある主体によって抱握されることが不可欠だというのである。これは、ホワイトヘッドに見られる疑似バークリー的要素だと言ってよい。存在するとは、知覚される定めにあるということである。なぜこのように言われるのかというと、(a)現存するとは過去となる定めにあることであり、(b)この哲学では、ある主体に対して過去であることと対象であることが共に区別しえないものとされるからである。経験は、過去一として一持つ〈having-as-past〉というこの具体的方法を、抱握以外には他に何もそれに匹敵するものを我々に示していない。

この抱握理論を受け入れることによって、驚くほど多くの問題が一挙に解決される。他の諸事象に対する事象の内的関係は存在するか。存在する。というのも、諸事象が他の事象を抱握する限りそれらの事象は他の事象に対するその関係によって構成されるから。外的関係は存在するか。存在する。なぜなら諸事象が自身では抱握しない後続の〈subsequent〉事象によって抱握される限り、それらは後続の事象とは独立しているし、相互に同時的な事象であっても相互に行き来する抱握がなければ、それぞれに独立していると言えるから。因果的関連性は存在するか。存在する。第1に、

諸事象の生起は厳密には、それらが抱握する諸事象の生起を必然的に伴う〈entail〉から。第2に、過程は進行をよぎなくされているので、後続の諸事象が先行の諸事象〈predecessors〉に相応しい抱握者であるためには、つまり先行者を客体化し（いわゆる）過去化〈pastify〉するためには、先行者との共通点を充分に持つ必要があるからである。最後に、現実には非決定性という自由な存在するか。存在する。しかもあらゆる場合に。なぜなら、諸事象は厳密には決して全く〈precise〉それらの後続者に依存しているわけではないし、また完全にそれらに包含されているわけでもないから。こうして、ホワイトヘッドはこれまでにその前例を見ないほど、巧みで堅固な自由論を提示する。主体は1つではなく多くの先行の〈prior〉諸存在〈actualities〉を抱握する。（でなければ、世界には時間的構造はあるものの空間的構造がないことになろう）多は一になり一によって増される。〈The many become one and are increased by one〉単一な〈single〉新しい存在は、その所与として、これまでの多くの存在を含んでいるが、果たして、多が一体どのようにして1つの新しい統一性〈unity〉へと向おうとする多の統合化〈unification〉の動きを、曖昧さなく指図できるのであろうか。単に多が1つの新しい存在になるということだけではなく、いかにして多が1つの新しい存在となるかをも定めようとするには、ある創発的ないし創造的な総合を必要とせねばならない。決定論では、おそらくこの障害を切り抜けることはできないであろう。このこと〈The that〉に関しては、それが因果的に決定づけられているという点で確かに必然的だと言ってよいが、そのいかに〈the how〉に関しては、因果的には決定づけられず、それ故必然的ともされえないからである。

従って、ホワイトヘッドの所与性〈givenness〉に対する見方は、ある一定の認識論的諸問題を解釈するだけでなく、因果的関連性に関するヒュームの懐疑論にも1つの解答を与えながら、しかもその全く反対の極にある偶然性と自由を否定する絶対的観念論をも回避するものである。ある単一の概念で、それは世界の空時的構造、認識〈Knowledge〉の可能性および自由の実在性を説明しており、私見では最高の知的発見の1つだと思われる。

ホワイトヘッドとアリストテレスに関する覚書

ホワイトヘッドの観点が、アリストテレスの観点ときわだって異なっている点は、アリストテレスにも生成の理論は見られたが、自分はそれに消滅の理論を付け加えたのだというホワイトヘッドの言葉によく見てとることができる。未来が潜在性〈potentiality〉として現在のうちに含まれるとするのは両者とも同じだが、過去はいかにして現在のうちに含まれるのだろうか。潜在的なもの〈potentialia〉としてでないことは明らかである。とすれば、現実的なもの〈actual〉としてか。それともある第3の様態があるのだろうか。消滅するということは、過去が現在のうちに不滅な存在として現実化するということである。通常、この種の客体的不滅性〈objective immortality〉は、全く欠陥だらけで抽象的になりすぎ、過去の生々しさを正当に評価できない場合が多いのだが聖なるもの〈divine〉の客体化には、全くそれがない。

批評家の中には、消滅した諸存在が残存して新しい諸存在の構成に込め込むことなどありえないと言うものがあるが、ここで使われている消滅するという言葉は、根絶される〈annihilated〉ということは勿論、実在性にとぼしくなる〈change into a diminished reality〉ということさえも意味しない。なぜなら、諸存在は変化しないからである。存在〈entity〉というも

のは、その決定を達成しているのでその決定を再考することも改めて決定し直すこともできない。つまり、不確定さ<indeterminacy>が消えてしまっている以上、成り終えた<finished>その存在は、1つの所与として、次の総合によって受け入れられる他ないということである。消滅することと新しい諸存在によって客体化されることは、同じことを意味している。それ故、諸存在はお互いに干渉し合うことはできない。消滅するという言葉は、ここでは1つの隠喩にすぎないが、それが危険な隠喩であることは確かである。自己一達成された<self-completed>存在は、後続の諸総合での所与として使われる。ただそれだけのことである。 (1986年9月30日受理)

原注 (1)ホワイトヘッドの『科学、哲学論文集』(New York:Phiosophicl Library 1948) P.89

訳中の括弧について

()は著者の補足

[]は著者が編集時に新たに挿入したもの

< >訳者による原語挿入